1920年代のアメリカ詩

——前衛詩を中心に——

岩山太次郎

1920年代の小説には，かなり明瞭に，その時代の特長が反映しているが，詩の場合には，それが稀薄である。従って20年代とその時代の詩という事柄を問題にしても，我々は詩からは，20年代の社会的，或は歴史的な特質を直接には知ることは出来ないし，又，その時代の詩の本質に触れることも出来ない。

ところが，アメリカの詩の歴史という観点からすれば，確かに1920年代という時期は非常に重要な時期である。第一次大戦後からの十数年間の間に書かれた詩には，それ以前に書かれた詩には見られなかった様々な要素が新しく加わり，アメリカ詩の歴史の上で一つのエポックを形成している。1915年に出版された Van Wyck Brooks (1886—1963) の *America's Coming-of-Age* という本の題名は，この頃既にアメリカ文化が成年期に達したことを物語っているかのようではあるが，これは，Puritanism 或は "genteel tradition" の上に立った文化が成年期に達したこと，文学で言うならば，やっとイギリス文学の亜流から脱却し独立した文学になったということであって，それは決して新しい時代の新しい文学が成年期に達したということではなかった。このことは詩についても言えることである。普通よく言われるように，1910年代に，アメリカ詩のルネサンスがやっと芽生えたのである。そして，1920年代の詩は，このルネサンス期の詩を基盤として，その上に成長したものであるから，簡単に10年代の詩に目を向けなければ，20年代の詩を理解することは出来ない。

「新しい詩」の精神の源泉は，Walt Whitman (1819—1891) の *Leaves of Grass* (初版1855) や E. A. Robinson (1869—1935) の *The Children of the Night* (1897), William Vaughn Moody (1869—1910) や Edwin Markham (1852—1939) の詩にあるとは言え，1912年に Chicago で Harriet Monroe (1860—1936) が *Poetry* という雑誌 (1912—　) を創刊した頃より「新しい詩」は始まるのである。当時 London にあった Ezra Pound (1855—　) や Amy Lowell (1874—1925) が，この雑誌の旗頭であって，イマジズムという詩の運動を興した。Pound 自身は1912年10月に出たこの雑誌の第1号に二篇の詩を寄せ，1913年冬にはイマジズムの主張にあうような詩を集め，翌年に *Les Imagistes* を出した。後 Pound がこのグループを去ったため，Amy Lowell が若いメンバーを集めて，1915年，1916年，1917年に夫々一冊の *Some Imagist Poets* というアンソロジーを出した。"A Retrospect" という回想録で Pound の語るところによれば，このグループの詩人たちは，少なくとも次の三つの主張をもっている：

1）主観的，客観的をとわず，「事物」を直接に扱うこと，
2）表出に役立たぬ言葉は絶対に使用せぬこと，
3）リズムについては，単調なメトロノーム的調子ではなく，音楽的調子で作りあげること[1]。

---

1) Ezra Pound, "A Retrospect," *Literary Essays of Ezra Pound* (London: Faber & Faber, 1954), p. 3.
(1) Direct treatment of the "thing" whether subjective or objective.

このグループには三人のイギリス人，D. H. Lawrence, Richard Aldington, F. S. Flint と三人のアメリカ人，H. D. (1886—1963), John Gould Fletcher (1886—1950), Amy Lowell がいた。彼等の主張は，決して，新しい説ではなく，真の詩は当然それらの要素を持っているべきなのであるが，当時の批評家たちにすれば全く異端な詩の運動であった。*Poetry* 誌が新しい詩人や流派を紹介したのをきっかけに，注目すべき数多くの詩人がこの頃に排出している。主な詩人と作品名をあげてみよう：Ezra Pound の *Canzoni* (1911), *Ripostes* (1912), Vachel Lindsay (1879—1931) の *General William Booth Enters Heaven* (1913), *The Congo and Other Poems* (1914), James Oppenheim (1882—1932) の *Songs of the New Age* (1914), Amy Lowell の *Sword Blades and Poppy Seeds*, Robert Frost (1875—1963) の *North of Boston* (1914), Edgar Lee Masters (1869—1950) の *Spoon River Anthology* (1915), Johm Gould Fletcher の *Irradiations* (1915), E.A. Robinson の *The Man Against the Sky* (1916), Carl Sandburg (1878—1963) の *Chicago Poems*.

Poetry 誌がそうであるように，所謂 "little magazine" が数多く出版されだしたのもこの頃からである。1916年から1939年までには，少くとも50の小雑誌が大西洋の両岸で刊行されたということである[2)]。Margaret C. Anderson (?1893—) の編集になる *The Little Review* (1914—) は "life for art's sake" をモットーに，「不完全な国民より個人を信じ」，アナーキズムを主義として，これも Chicago で刊行されたし (James Joyce の *Ulysses* の一部はこの雑誌にはじめて掲載された)，New York では Marianne Moore (1887—), William Carlos Williams (1883—1963) や Wallace Stevens (1879—1955) が実験派の雑誌 *Others* (1915—1919) を，Ford Madox Ford (1873—1939) は *The English Review* (1914—1929) を，James Oppenheim, Waldo Frank (1889—), Van Wyck Brooks は New York で *Arts* (1916—1917) を，Wyndham Lewis (1884—1957) は *Blast* (1914—1915) をイギリスで，同じイギリスで Richard Aldington が *The Egoist* (1914—1919) を刊行している。現在も刊行されている *Poetry* 誌以外は，これらの "little magazine" はいずれも短命であったが，新しいアメリカの詩を成長させた意義は大きい。

このように第一次世界大戦前の1910年代にアメリカの詩はそのルネサンス期を迎えたのである。彼等詩人たちは一様に，それ以前の詩にみられたような社会的，道徳的な圧力を詩から排除することにつとめ，詩において新しい芸術上の自由を求め，多くの可能性を開いたのである。所謂 "comstockery" からの自由である。彼等は古い詩法に反抗し，詩に "seriousness" と思想を必要と考え，因習的な詩法，「詩的」語法を排除することにつとめた。

ルネサンス期に活躍した大部分の詩人たちは，大戦後も活躍をつづけた。大戦後になって彼等の作品にみられる主な特長としては，まず第一に，戦争による幻滅感が彼等の心の底に流れていて，詩自体が非常に内省的になり自意識の強いものになったことであろう。従って，彼等のグループは chaotic であり，夥しい数のグループが作られてはつぶれ，そして別のグループになって行った。しかし，chaotic であったということは，彼等が少しでも既成の観念を打破して，何か新しいものをつくり出そうと努力していたからこそである。それは伝統的な「お上品な」詩に対する反抗の現われである。イギリスの詩をお手本にしたような亜流の詩には飽足らず，詩をもっと international なもの

(2) To use absolutely no word that does not contribute to the presentation.

(3) As regarding rhythm, to compose in the consequence of the musical phrase, not in sequence of a metronome.

2) Horace Gregery and Marya Zaturenska, *A History of American Poetry, 1900-1940* (New York: Harcourt, Brace & Co., 1946), p. 166.

に向わせた。彼等はヨーロッパの詩に（少し意味は異なるが，東洋の詩にも）学ぶ態度を持ち，Jules Laforgue (1860—1870) や Edouard-Joachim Corbière (1845—1875), Stéphane Mallarmé (1842—1898) などの詩に大いに学んだ。これは，この頃の "little magazine" が殆んどすべて international なものであったこととも関連することであり，1910年代，20年代の詩を考える場合には，アメリカ以外の国で刊行された "little magazine" も無視出来ない所以である。

ルネサンス期の詩人と同様，既成の観念の打破をめざし，新しいものを生み出そうとした彼等は，すべてと言ってよいほど，詩の言語と用語において新しい実験を行ない，fresh な expression を求めた。或るものは Dadaism や Surrealism に向ったし，或るものは loose になりすぎた自由詩の形式と内容の代りに，詩において thought, passion, belief や intellect の unity を求め，新しい秩序と知的な美観念の上にたった非常に metaphysical な詩を創作した。これは1922年11月の *The Dial* 誌にアメリカでは初めて発表された T. S. Eliot (1888—　) の *The Waste Land*（イギリスでは同年10月に *The Criterion* 創刊号に発表された）に顕著にみられるところである。この詩にもみられるように，もう一つ新しいものが1920年代の詩人の知性の背後に加わった。それは，1890年から現われていた Sir James Frazer (1854—1941) の *Golden Bough*: *A Study in Comparative Religion* をもととする文化人類学，Jessie Weston (？—1928) の *From Ritual to Romance* (1920), (Holy Grail を人類学的方法により探求したもの)，Sigmund Freud (1856—1939) の精神分析学などの知識である。

1910年代の詩と大戦後の詩との相違として最後にあげられることは，大戦前の新しい詩の創造の面には"stable and informed criticism"[3] が伴っていなかったということである。確かにイマジズムの宣言のように，新しい詩の要素になるものの指摘はあったとは言え，それはあくまでもスローガンであって，批評的な裏付けではなかった。真の意味で批評の裏付けを伴った詩というものは T.S. Eliot の "The Love Song of J. Alfred Prufrock" (1917) やさきにあげた *The Waste Land*, Ezra Pound の "Hugh Selwyn Mauberley" (1920, アメリカでは1926年にはじめて彼の *Personae* に入れられた）を待たねばならないのである。

Harvard 大学で Irving Babbitt (1865—1933) や George Santayana (1863—1952)の下で学んだ T.S. Eliot は，卒業後 Sorbonne 大学，Oxford の Merton College などに留学した。"Portrait of a Lady" や "The Love Song of J. Alfred Prufrock" の原稿が1914年当時 London にいた Pound の目にとまり，彼の肝煎りで，1915年6月号の *Poetry* に "Prufrock" が掲載された。1917年には処女詩集 *Prufrock and Other Observations* が Egoist Press から上梓され，1920年代の詩の第一歩が踏み出されたのである。1917～19年には *Egoist* 誌の編集助手となり，イマジスト運動にも参加し，1910年 September-October 号の *The Egoist* 誌で "Tradition and the Individual Talent" の評論を世にとい，印象批評に反対し，文学伝統を強調して新しい批評をうちたてた。（これは後に *The Sacred Wood* (1920) に含まれた。）1922年には *Criterion* 誌 (1922—1939) を創刊し，第1号の10月号に有名な "The Waste Land" を発表し，戦後の生活の幻滅と絶望を斬新な形式で表現した。

Eliot の関心は，複雑な過渡期の世界の物質的・精神的状態を検討・解明することの出来るような詩的表現を創造することであった。彼は，それをエリザベス朝後期の戯曲と19世紀のフランスの実験的詩法（特に Laforgue や

3) Louise Bogan, *Achievement in American Poetry, 1900–1950* (Chicago: Henry Regnery Co., 1951), p. 64.

Corbière の自由詩）との接触によって確立し，自由詩という形式の中に，詩的現実とその情緒とを統合した。それが *The Waste Land* であり，"Prufrock" である。我々はその中に，時代の不安定さという深い感覚を，それまで表現されることのなかったリズムと言語を通して，魂の状況の言葉として読みとることが出来る：

And would it have been worth it, after all,
After the cups, the marmalade, the tea,
Among the procelain, among some talk of you and me,
Would it have been worth while,
To have bitten off the matter with a smile,
To have squeezed the universe into a ball
To roll it toward some overwhelming question,
To say: "I am Lazarus, come from the dead,
Come back to tell you all, I shall tell you all"—
If one, settling a pillow by her head,
Should say: "That is not what I meant at all;
That is not it at all."

I grow old....I grow old....
I shall wear the bottoms of my trousers rolled.

Shall I part my hair behind? Do I dare to eat a peach?
I shall wear white flannel trousers, and walk upon the beach.
I have heard the mermaids singing, each to each.

I do not think that they will sing to me.
("The Love Song of J. Alfred Prufrock," 11. 87-98, 120-125.)

勿論 Eliot は現実世界に対する幻滅のみをうたったわけではない。*The Waste Land*の最後にみられるように，伝統と秩序の中に未来に対する光を見出している：

I sat upon the shore
Fishing, with the arid plain behind me
Shall I at least set my lands in order?
London Bridge is falling down falling down falling down
Poi s'ascose nel foco che gli affina
Quando fiam uti chelidon—O swallow swallow
Le Prince d'Aquitaine à la tour abolie
These fragments I have shored against my ruins
When then Ile fit you. Hieronymo's mad againe.
Datta. Dayadhvam. Damyata.
Shantih shantih shantih
(*The Waste Land*, 11.424-434)

Eliot の初期の批評が批評界のみならず，詩人に及ぼした影響は非常に重要である。"Honest criticism and sensitive appreciation is directed not upon the poet but upon the poetry"[4] という言葉は，後に「新批評」の最も重要な原理になったのみならず，詩人たちを教育によって教えられてきた種々の流派や影響から脱却させ，自分たちの発見を詩作で実行させる文学探求の道を示した。Eliot 自身も *The Sacred Wood*（評論集）で，広い学識に支えられた，しかも常に詩作品そのものという見地から，詩の詳細な吟味と分析を行った。過去の詩人についても，従来の単なる学問的な絆から彼等の詩をきりはなし，実際の作品そのものから結論を引き出そうとした。そして，新しい詩人たちには新しい彼等の時代の独創性を要求しながら，歴史的な展望を身につけさせた。

4) T.S. Eliot, "Tradition and the Individual Talent," *The Sacred Wood* (London: Methuen & Co. Ltd., 1920), p. 53.

Eliot の "Prufrock" や *The Waste Land* が現代に対する厳しい告発であったように，Ezra Pound の "Hugh Selwyn Mauberley" も大戦後の人間像，London の生活に対する批評であり，縮図である。1905年に Pennsylvania 大学で M. A. を取った彼は，1907年に渡欧し，多くの有能なる人材を発見すること(特に James Joyce, Eliot の発見) やイマジズムの運動に貢献したのみならず，彼自身も，詩集 *A Lume Spento* (1908) や *Personae* (1909) (これには未だ "Hugh Selwyn Mauberley" は含まれていなかった)，翻案詩集 *Provanca* (1910), *Canzoni* (1911), *Ripostes* (1912), *Cathay* (1915), *Lustra* (1916) などを世にとい，中国や日本の詩，中世プロバンスの文学への関心を示していた。しかし，現代詩において真の意義をもつ彼の作品は1920年に発表された "Hugh Selwyn Mauberley" と1928年より発表しつづけられた *The Cantos* である。前者においては，凝縮されたスタンザに，忌憚のない筆で，Mauberley という人物が一小詩人として書きあらわされている。それは Pound 自身でもあり，現代人の誰もでもある。Eliot はこの詩のことを次のように言っている：

> It is compact of the experience of a certain man in a certain place at a certain time; and it is also a document of an epoch; it is genuine tragedy and comedy; and it is, in the best sense of Arnold's worn phrase, a "criticism of life."[5]

又，Frederick Hoffman は *The Twenties* の中で，"Mauberley" を Eliot の *The Waste Land* や Hemingway の *The Sun Also Rises* などと共に1920年代を代表する作品の一つであると論じているし[6]，1920年初頭の芸術家の立場をこれ程充分に探求した作品はない。*The Waste Land* が道徳，宗教，社会への深い関心をもって書かれているのに反して，"Mauberley" は美と芸術の伝統を問題にした作品で，それは商業主義と戦って敗れた一芸術家の敗北の運命の詩である。18篇よりなる長詩の第1番目の詩を引用しよう：

> "E. P. Ode Pour L'Élection de Son Sépulchre"
>
> For three years, out of key with his time,
> He strove to resuscitate the dead art
> Of poetry; to maintain "the sublime"
> In the old sense. Wrong from the strart—
>
> No, hardly, but seeing he had been born
> In a half-savage country, out of date;
> Bent resolutely on wringing lilies from the acorn;
> Capaneus; trout for factitious bait;
>
> *'Ιδμεν γάρ τοι πάνθ', ὅ' ἐνὶ Τροη*
> Caught in the unstopped ear;
> Giving the rocks small lee-way
> The chopped seas held him, therefore, that year.
>
> His true Penelope was Flaubert,
> He fished by obstinate isles;
> Observed the elegance of Circe's hair
> Rather than the mottoes on sun-dials.
>
> Unaffected by "the march of events,"
> He passed from men's memory in *l'an trentiesme*

5) Ezra Pound, *Selected Poems* (ed. with an intro. by T. S. Eliot; London: Faber & Faber, 1933), p. 24.

6) Frederick J. Hoffman, *The Twenties* (New York: The Viking Press, 1955)
Hoffman は各章の後に20年代を代表するような作品を一つずつとりあげ詳細に論じている．それらは，Ezra Pound: "Hugh Selwyn Mauberley", Hemingway: *The Sun Rlso Rises*, Fitzgerald: *The Great Gatsby*, Willa Cather, Hart Crane: *The Bridge*, Eliot: *The Waste Land*, Sinclair Lewis: *Babbitt* である．

De son eage; the case presents
No adjunct to the Muses' diadem.

Eliot, Pound 或は Gertrude Stein (1874—1946) を先頭とし，当時芸術的で，実験的方向に進んでいた若い詩人たちの業績も，ようやく1920年代になり認められるようになってきた。彼等はいずれも，イマジズムと Pound-Eliot の流れに沿って自己の道を見出してきた。1920年代に活躍したこれらの詩人たちの中では，特に，William Carlos Williams (1883—1963), Wallace Stevens (1879—1955), Marianne Moore(1877—), E.E. Cummings(1894—1962) などが注目すべき作品を書いている。

詩人であり医師であった William Carlos Williams は，早く1909年に最初の詩集 *Poems* を出版し，平凡な事柄の核心を本能的に間違いなくつき，土地の言葉を自由に駆使し，日常の出来事に虚心に接した詩を得意とした。早くから災害保険会社に関係し，後には副社長にまでなった Wallace Stevens は，最初の詩集 *Harmonium* を1923年に出版している。彼の詩には印象主義的なところ，世紀末的なところもあるが，エキゾチックな美と想像力の豊さ，ドラマティクな感覚，形式に対する感覚と言葉の才能にすぐれていて，"Peter Quince at the Clavier", "The Emperor of Ice-Cream" 等数多くの有名な詩を残している：

Call the roller of big cigars,
She muscular one, and bid him whip
In kitchen cups concupiscent curds.
Let the wenches dawdle in such dress
As they are used to wear, and let the boys
Bring flowers in last month's newspapers.
Let be be finale of seem.
The only emperor is the emperor of ice-cream.

Take from the dresser of deal,
Lacking the three glass knobs, that sheet
On which she embroidered fantails once
And spread it so as to cover her face.
If her horny feet protrude, they come
To show how cold she is, and dumb.
Let the lamp affix its beam.
The only emperor is the emperor of ice-cream.

("The Emperor of Ice-Cream")

同じような詩人に Marianne Moore がいる。1921年に London の Egoist Press から *Poems* を出版し，1925年にはアメリカでこの *Poems* に一部新作を加えた *Observations* を出版した。彼女は所謂 "hybrid composition" を駆使し，色彩と音に対する鋭い感覚（例えば，目立たない rhyme やシラブルの配列を考えた形）により，抽象的な真理を事物の核心にふれる直感的表現によって表わした。*Observations* に含まれている "Poetry" では彼女の詩に対する考えを巧みに表現している：

...when dragged into prominence by
half poets, the result is not poetry,
nor till the poets among us can be
"literalists of
the imagination" above
insolence and triviality and can
present

for inspection, "imaginary gardens with
real toads in them",
shall we have
it. In the meantime, if you demand on
the one hand,
the raw material of poetry in
all its rawness and
that which is on the other hand
genuine, then you are interested in poetry.

(11. 24–36)

第一次大戦でフランスで輸送隊に入り，後アメリカ陸軍に配属されたが，陸軍検閲官の間違いから三カ月間収容所に入れられた E. E. Cummings は，その時の体験を *The Enormous*

Room (1922) で描き，「失われた世代」の小説家として最初登場した。しかし，彼は，詩における実験派の巨匠であり，1923年に最初の詩集 *Tulips and Chimneys* を発表して以来昨年9月に没するまで三十数年間，形破りの形式と奇抜な typography の手法を用いた詩を書きつづけた。詩集の題名を見ただけでも奇抜なものが多く（例えば，& 〔And〕(1925), is 5 (1926),“ ”(1927, 題名がないということ), *W* 〔ViVa〕(1931), *no thanks* (1925), 1×1 [One Times One] (1944)), 大文字を使わず小文字だけで行をはじめたり，活字やダッシュ，コンマを抽象画のように散らしたり，単語を自由に分割或は連結したり，種々な新奇な技巧とスタイルを創造した。彼の作品の基盤になっているものは，古風なロマンティックなリリシズムであるが，Dadaism や Surrelaism に関する新知識を彼流の言葉に直したあの若々しいバーレスク風な感覚は，常に現代の機械文明社会の重苦しさに，自我と主体性を失った人間の姿である。彼自身が署名する時，e. e. cummings とすべて小文字で，又，作品中の第一人称単数の代名詞を小文字“i”で書くのも，この一つの現われであろう。

1910年代に現代詩の母体をはぐくむ大きい要素になった“little magazine”は，20年代にも数多く刊行されていて，それらは上にあげたような前衛詩人の詩や評論を，又，伝統的な詩人の作品を発表する場を提供している。それらは単に詩の発表の場としてのみならず，1913年に設定された“*Poetry* award”や1917年より出来た“The Pulitzer Prize”にならい，賞を詩人に与えることにより，彼等の詩の価値を一般に拡めるのに役立った。

月刊誌 *The Dial* が Scofield Thayer を編集者として1920年1月に新発足したことは（この雑誌の起源は古く1880年にさかのぼるのであるが）現代アメリカ詩の歴史上重要な出来事である。偏狭を排し，ヨーロッパからの通信を掲載するなど，公正な態度で欧米の芸術の色々な趨勢を論議し，批評と創作との内面で協調をその編集方針とした。先きにも述べたように，Eliot の *The Waste Land* が *The Criterion* に発表されると，一早くこれを1922年11月号に掲載したのもこの雑誌である。“*The Dial's* award”も実験派の詩人に好意的であった。1921年には Marianne Moore に，1922年には T.S. Eliot に，1922年には再び Moore に，1925年には E. E. Cummings に，1926年には，William Carlos Williams に，1927年には Ezra Pound に，この賞は与えられている。

The Dial 誌及び“*The Dial's* award”と“The Pulitzer Prize”との対立は，アメリカの前衛文学と伝統的文学とが，はっきり対立していたことを示すものである。Louise Bogan の指摘するように，1922年以降の“The Pulitzer Prize in Poetry”は“a rather close guide to this conservative tendency”[7] である。1920年の“The Pulitzer Prize in Poetry”の受賞者と受賞対称作品名をあげてみれば，この賞が，いかに保守的であったかは判然とするであろう：

1922 A. E. Robinson (1869—1935) : *Collected Poems*

1923 Edna St. Vincent Millay (1892—1950: *The Ballad of the Harp-Weaver*

1924 Robert Frost (1874—1963) : *New Hampshire*

1925 A.E. Robinson : *The Man Who Died Twice*

1926 Amy Lowell : *What's O'clock*

1927 Leonora Speyer (1872—1956) : *Fiddler's Farewell*

1928 A.E. Robinson : *Tristram*

1929 Stephen Vincent Benét (1899—1943) : *John Brown's Body*

1930 Conrad Aiken (1899—) : *Selected Poems*

1931 Robert Frost : *Collected Poems*

丁度，これらの二つの賞の中間にあるのが，

7) Louise Bogan, *op. cit*, p. 76.

"*Poetry* award" である。創刊当初の *Poetry* 誌がそうであったように，"*Poetry* award" も1910年代には革新的な詩を擁護する態度をとっていたが，20年代になると極端にはしらず，堅実な中道を選ぶようになる[8)]。投稿者の中心的な顔ぶれも，Sandburg, Lindsay, Crane, Fletcher 等であり，前衛的でも伝統的でもない詩が重じられた。

その他1920年代のアメリカの詩と密接な関係にある "little magazine" には次のようなものがある：

Contemporary Verse (1916—1929)
(Philadelphia)

Broom (1921—1924)
(Rome→Berlin→New York)

The Double Dealer (1921—1926)
(New Orleans)

Laughing Horse (1922—1934)
(California→Mexico)

Secession (1922—1924)
(Wien→Berlin→Florence→New York)

The Fugitive (1922—1925)
(Vanderbilt, Tenn.)

Palms (1923—1940) (Mexico)

The Transatlantic Review (1924—1925)
(Paris)

Aesthete (1925)

transition (1927—1929, 1933—1938)
(Paris→New York)

The Hound and Horn (1927—1934)
(Portland, Maine→New York)

これらの内，*The Fugitive* 誌には一言を要する。1922年4月に Tennessee 州の Vanderbilt で，John Crowe Ransom (1888—) を中心に Donald Davidson (1893—), Merrill Moore (1903—1957), Laura Riding Gottschalk (1901—), Elizabeth Madox Roberts (1886—1941), Allen Tate (1899—), 後に Robert Penn Warren (1905—) が加わり発行した雑誌で，1925年12月に廃刊になるまで19号出している。T. S. Eliot の *The Waste Land* が発表された二カ月後の12月に Allen Tate がその詩の重要性を認めたエッセイを一はやく発表したのがこの雑誌である。このグループの詩人たちは，創刊当初はこれといった主義主張ももたずに，詩の創作に志した文学愛好者の集りであったが，その後，創作のみならず，批評にも力をそそぎ，詩と "informed criticism" との合体を旨とし，詩を "autonomous entity" として理解・批評しようとし，後の所謂「新批評家」の中心となった人たちである。彼等は，又，"Southern Renascence" に大いに貢献した。

Richard M. Weaver は南部人の分析観念について次のように言っている：

> So opposed is the Southerner to the method of analysis that he seems to regard it as a treasonable activity, and I raise the question of whether this may not give us a better insight into his

8) 1913年より1930年までの受賞者は次の如くである：
1913: Ezra Pound, Vachel Lindsay: 1914: Louise Driscoll, Constance Skinner; 1915: H. D.; 1916: Muna Lee, Wallace Stevens, John Gould Fletcher; 1917: Robert Frost; 1918: Emanuel Carnevali, Ajan Syrian; 1919: Mark Turbyfill, Majorie Sieffert; 1920: Maurice Lesmann, Edna St. Vincent Millay; 1921: Hazel Hall, Ford Madox Ford; 1922: Robert Roe, Alfred Kreymborg; 1923: H. Stuart, Lola Ridge; 1924: Majorie Meeker, Marya Zaturenska, Amanda Benjamin Hall; 1952: Countee Cullen, George Dillon, Leonora Speyer; 1926: Herbert Gorman, Marie Luhrs, Agnes Lee; 1927: Jessica Nelson North, Leo Turner, Malcolm Cowley; 1928: Emanuel Carnevali, Horace Gregory, Vachel Lindsay, Sterling North, Ted Olson, Elizabeth Madox Roberts, Marion Strobel; 1929: H. Boner, Gladys Campbell, Archibald MacLeish, James Ryan, Charles Wagner, Winfred Welles; 1930: Louise Bogan, Polly Boyden, Abbie Huston Evans, Elder Olson.

essential mentality than the explanations which are commonly put forward.... It is his habit to see things as forms or large configurations, and he senses that the process of breaking these down (which is nearly always carried on for some practical purpose) somehow proves fatal to the truth of the whole. In fine, analysis is destructive of the kind of reality which he most wishes to preserve.[9]

このような一般の南部人とはおよそ正反対に，"Fugitive" グループの人たちは，主知的で，科学的批評を試みようとしたのである。南部は自分たちの出身地であるが，南部の特権階級から逃がれようとするとさえ Ransom は言っている。

しかし，Tennessee 州議会で，1927年に進化論禁止法案が通過した後に，或る教師がそれを無視して学校で進化論を教えたことで，裁判にかかり，北部の新聞が南部の保守性を批難すると，Ronsom や Tate, Warren などは北部の南部批難に反発し，Fundamentalism を擁護するようになる。そして，南部の古い文化や伝統に価値を見出そうとする。こういう南部の伝統の擁護という考えが，機械文明の発達により失われてきた人間性の回復をとなえる Agrarian Movement と結びつくのである。彼等のそういう態度は，例えば Ransom の "Two Gentlemen in Bonds" や Tate の "Ode to the Confederate Dead" などの詩にもみられる：

Turn your eyes to the immoderate past
Turn to the inscrutable infantry rising
Demons out of the earth—they will not last.
Stonewall, Stonewall—and the sunken
  fields of hemp,
Shiloh, Antietam, Malvern Hill, Bull Run.
Lost in the orient of the thick and fast
You will curse the setting sun.
("Ode to the Confederate Dead,"
11. 44–50)

我々は新しい詩を中心に1920年代の詩を概解してきた。従って，独創性はもっていたが伝統的な技法により淡々と New England の日常風物を，神秘的な詩情で写した偉大な現代詩人の一人である Robert Frost (1878—1963)[10]，*Chicago Poem* を1914年に *Poetry* 誌に発表した民衆詩人 Carl Sandburg (1878—)[11]，Vachel Lindsay (1879—1931) やカリフホルニアの孤絶の詩人 Robinson Jeffers (1887—1962) は論じなかった[12]。又，Hart Crane (1899–1932) にも言及しなかった。彼は科学と産業主義，機械主義の強力に支配する現代社会と感情を如何に詩の中に移し得るかを試み，見事に成功した詩人であり，20年代から30年代への橋渡しの役割を果しているという意味において，30年代の詩人として第一に論じられるべきであろう。

9) Richard M. Weaver, "Aspects of the Southern Philosophy," *Southern Renascence* (eds. Louis D. Rubin, Jr. and Robert D. Jacobs; Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1953), pp. 14–15.

10) Frost は20年代に *New Hampshire* (1923), *West-Running Brook* (1928), *The Cow's in Corn* (1929) の詩集を出している.

11) Sandburg の20年代に出版された主な詩集は，*Smoke and Steel* (1920), *Slabs of the Sunburnt West* (1922), *The American Songbag* (1927), *Good Morning, America* (1928) である．なお *The People, Yes* は1936年に出版されている.

12) 本文ではふれなかった20年代に活躍した詩人は Sara Teasdale (1884–1933), Edna St. Vincent Millay (1892–1950), Conrad Aiken (1889–), David McCord (1897–1948), William Rose Benét (1886–1950), John Hall Wheelock (1886–), George Dillon (1906–), Lizette Woodworth Reese (1856–1935), Archibald MacLeish (1892–), Genevieve Taggard (1894–), Jean Untermeyer (1886–), Louise Bogan (1897–), Léonie Adams (1899–), Hazel Hall (1886–1924), Elinor Wylie (1885–1928)等がいるし，Horace Gregory (1898–)や Marya Zaturenska (1902–), Muriel Rukeyser (1913–), Kenneth Fearing (1902–1961), Laura Riding (1901–) なども20年代後半より活躍を始めた詩人である.